

前号で伝えた通り、JR北海道労組は革マル派が浸透する疑惑を持たれて捜査当局にマークされている。そうした労働組合が“責任組合”として会社が相当配慮するような影響力を持ち「経営協議会」等で経営幹部に意見している。これは明らかにJR北海道の経営リスクだ。JR東日本はそのようなリスクを排除すべくJR東労組との“労使共同宣言”を破棄した。それ以降、4万人を超える組合員がJR総連・JR東労組と決別した。

なぜ、同じJR総連傘下のJR東労組における大量脱退はJR北海道労組に波及しなかったのか。西岡研介氏の著書「トラジャ」（2019年／東洋経済新報社）を読むとその背景を推測できる。JR北海道の現職社長および社長経験者の2名、JR北海道労組で青年部役員を務めた元組合員が自死している事実等から、会社は「JR北海道労組と揉めたくない」、組合員は「会社が労使共同宣言を維持している中で組合脱退を言い出せば面倒なことになる」というマイナスの動機を抱いているのではないかと推測される。

残念ながら、JR北海道の新入社員も同じような状況にすぐ陥ってしまう。「JR北海道における労働組合問題」は彼らの間でもかなり有名だ。WEBを検索すればすぐに多くの関係情報にアクセスできる。しかし、入社して直面するのは「加入しない」とは言えない実態なのだ。

～驚くべき新入社員加入活動の実態～

JR総連・JR北海道労組というリスク(中)

JR北海道労組の新入社員に対する加入活動について、複数の当事者から聞いた内容を紹介したい。JR北海道の新入社員は4月の入社直後「社員研修センター」に入所する。1～2か月程度の集合研修を受講し10数名のクラス単位で研修が行われる。この中で事前にJR北海道労組の“指示”を受けた新入社員が、クラス内の同期社員らにJR北海道労組の加入に関する書類一式を渡し「加入届」を回収するという形で加入が進められていく。JR北海道労組と加入活動を先導する新入社員との個別の接点は不明だが、入社前に情報を得て、出身校の先輩・後輩という繋がり等から選定するのが通例らしい。

そしてJR北海道労組は各クラスの新社員をリスト化して加入届を出していない者をチェックし、社員研修センターのエントランスでの声掛けや携帯電話への架電を通じて「なぜ加入届を出さないのか」「早く提出するように」等と迫るなどして、研修中に100%に近い加入を達成してきた。そもそもJR北海道労組だけに研修中の会社施設内でこうした加入活動を許していること自体、不当労働行為である可能性が高い。ところが2022年には、10名を超える新入社員がこうしたやり方に大きな違和感を抱き、JR連合加盟のJR北労組に加入した。これがJR北海道労組の“プライド”を大きく損ねたようだ。

新入社員研修中に「JR北海道労組」の加入へ繋がるシステムを構築

2023年4月2日以降、JR連合とJR北労組はJR北海道「社員研修センター」前で、アピール行動として、組織や活動を紹介する広報紙の配付等を行った。ホームページやSNSアカウントの“QRコード”を貼り付けたA1サイズのボードも複数掲げ、社員研修センター内の新入社員もスマホからアクセスできるようにした。これに対してJR北海道労組は、過去にも増して役員を連日動員の上、社員研修センターからの出入りを行う新入社員に「ビラは受け取らないように」と呼び掛け、受け取ったビラを回収するという驚くべき妨害も行った。どの組合に加入するかは自由だ。JR北海道労組が未だ組合に加入していない新入社員に対して、JR北労組のビラの受け取りを拒否させたり、ビラを回収したりすることが許されるはずがない。JR連合側の役員に対しても「あなた達は何をしに来たのか。あなた達には何もできないし、やっていない」旨の侮蔑的な言葉を浴びせた。

現地にいたのは、JR北海道労組中央本部や青年部、札幌地方本部内の役員らだ。特に新社員の多くが自宅に帰るなど出入りが頻繁となる金曜の夕刻は10名～20名が動員されていた。平日の夕刻は、2022年4月には動員がなかったが、2023年4月は札幌地方本部の札幌運転所分会役員が複数いた。彼らは中央本部役員より意識が低く「あなた達がいたのでは我々は帰れない」「寒いから早く切り上げて欲しい」等と音を上げる始末であった。嫌々ながら動員されていることがわかる。

新入社員に満足な説明もせず、最後は圧力をかけ加入を迫るのが実情

2023年4月の新社員の多くは、研修第3週目となる4月17日までには加入届を出すよう迫られていたようだ。例年は5月半ば頃の職場配属前までという期限より相当早い。前年の轍を踏まないようJR北労組に加入しないうちに困り込もうという魂胆がありありと読み取れる。それでもJR連合側の前述したアピール行動の効果はあり、複数の社員からJR北労組への相談がなされていた。しかし、度重なる役員からの、場合によっては配属先の先輩を名乗る人物からの圧力の電話も受け、根負けして最終的にJR北海道労組の加入を決断した者が多数存在する実態を、私たちは具体的に把握している。